

漂泊の俳人

# 種田山頭火

と

## 其中庵



# ～ 目 次 ～

はじめに… 3

山頭火、その生涯。… 4～7

其中庵… 8～9

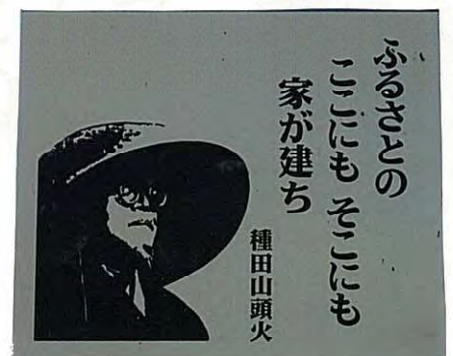
種田山頭火の主な詩… 10

感想… 11

参考資料… 12

# はじめに。

『山頭火』という不思議な名前  
の詩人を国語の資料を見て知りまし  
た。最初あまり意味が分らなかったが、  
何故か心に残る響きでこの人をも  
っと知りたいと興味をわきました。  
その資料館が山口県にあると中  
事だったのを夏休みに行った時に調  
べたことをまとめました。





# 山頭火、その 生涯。

種田山頭火(本名:種田正一)は、行乞の旅の中で自由律俳句を作りつづけた漂泊の俳人である。

山頭火は、明治15年12月3日に、山口県防府市の大地主、種田竹治郎の長男として生まれた。周田からも「正さま」とよばれ大事に育てられた。しかし11歳の時、母つさが自宅の井戸で投身自殺をする。彼にとっての「不幸」はここから始まる。自殺の原因は父の女性関係であったというが、山頭火は、この衝撃的な母の死を生涯忘れるこゝとのできない大きな傷として、抱きしめて生きていくことになる。



その後、家の没落、兄弟の死、望まぬ結婚などの不如意な運命の押し寄せられる人生の中で、彼は文学に心を寄せつづけた。最初は外国文学の翻訳などもしていたが、やがて当時新しい文学として躍動を始めていた自由律俳句に力を注いでいった。生活人として暮らしていくことと、自らの魂の求めるものとの相克に悩みつづけた山頭火は、あの事件をきっかけに禅の精神へと傾倒していく。44歳の時、得度して「耕畝」と改名した山頭火は、法衣をまとって鉄鉢を手に傘をかがって、行乞の途中に句作しながら自らの生き方を求める放浪の生活に入る。

しかし年齢が重なるにつれて、行乞の旅は心身ともに負担が大きくなっていく。49歳の時、熊本市内に仮寓「三八九居」を構え、俳句雑誌「三八九」第1集・第2集を発刊するが、諸事情により部屋を引き払わざるをえなくなる。



その後、行乞の旅で行き着いた嬉野、川棚などにも安住の場所を捜し求めたが、なかなか結庵には至らなかった。

そのような折、山口農高書記であつた句友、国森樹明の「もし川棚の方が居いけないうでしたら、ここにも庵ありするに似合いますよ」という言葉を思い出した。そして、樹明を中心とした句友らの援助に よつて、小郡の矢足にある小さな萱葺の家を借りて結庵する。昭和7年9月20日、山頭火51歳の時この年ある。それから7年間、俳人山頭火として最も長い定住の間、この「其中庵」で過ごすこととなるのである。

其中庵での生活で山頭火は第2句集『草木塔』、第3句集『山行水行』、第4句集『雑草風景』、第5句集『柿の葉』、俳句雑誌『三八九』第3集、第4集、第5集などを出版した。



畑を作り、行乞をし、友を迎え、酒を  
飲み、わずかながらも近所づきあいを  
し、時には長い行乞の旅に出ながら、  
自分と俳句とをじっくりと見つめ結実  
させていく熟成の時間だった。それは  
また、山頭火が生活人としての生活を  
営んだ貴重な時代でもあった。

昭和13年11月、其中庵の老朽化が進  
み、住むに耐えなくなり、小郡を去る  
。11月28日山口湯田前町、徳重正人宅  
裏家に「**風来居**」を構える。

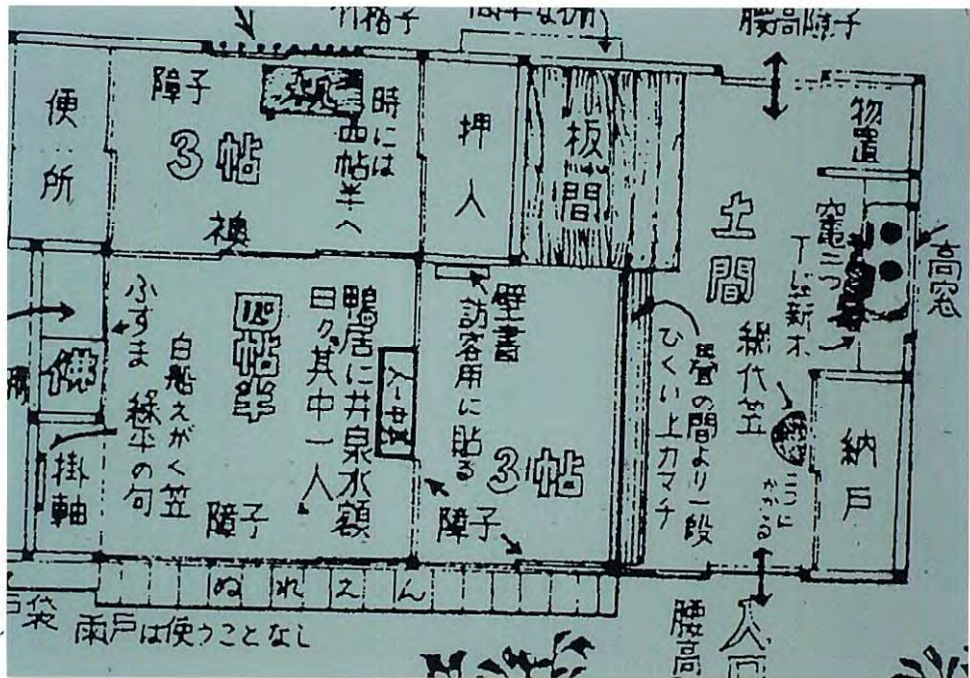
昭和15年、山頭火を慕う俳句仲間が  
「**柿の会**」を結成。4月**一代句集**『**草**  
**木塔**』を発刊。7月、**第7句集**『**鴉**』  
を発刊。10月11日コロリ往生。**山頭火**  
**58歳**だった。

# 其中庵

山頭火が7年間定住した其中庵。この語源とは一体なんなのか。

山頭火が好んだ言葉に、法華經の「普門品」にある「其中一人作是唱言」という一節がある。これは災難や苦痛に遭ったとき、その中の一人が「南観世音菩薩」と唱えると観世音菩薩は、直ちに救いの手を差し伸べられて、皆を救われ、悩みから解き放たれるという意味である。山頭火は結庵するとき「其中庵」と命名するのだと平素から友人にも語り、旅日記にも書き止めていた。其中庵の語源は、この其中一人を自分に置き換え、その一人が在る庵という意味で、「其中庵」となったものである。







# 種田山頭火の 主な詩

1. 分け入っても分け入っても青い山  
● いくら歩いても青い山ばかり。  
呼んでも答えはなく、心の惑いは  
消えない。

2. 夕立やお地蔵さんもわたしもずが  
ぬれ  
● 雨の中に漂泊の身をさらして道端  
の地蔵を友として立つ。両者の存  
在は一体。

このような詩を自由律俳句とゆう。  
自由律俳句とは、定型や季語にとら  
われず、感動や印象を自由に表現し  
た俳句。



# ～感想～

種田山頭火の人生は、「見習いたい！」と思うような人生でした。

私は、小説や物語りは多く読みます。けれど詩や俳句はほとんど読んだ事はありません。知っていてその詩を読んだ事があるのは、金子みすゞぐらいでした。しかし山頭火の俳句を読むと情景が浮かぶ上がるので「こんな俳句もあったのか」と感動しました。

私のオスス×の俳句はこれです。  
「草は咲くがままのておてお」  
「寝ころべば青い空で青い山で」  
の二つです。

「ておてお」とは蝶の事らしいです。二つ目は、「涼しげな風が吹いている丘の上に寝ころびたい」という思いがわいてくる俳句だと思いました。なんでも興味を持って調べる事の大切さを知りました。

# 參考資料

新潮日本文学アトハム  
「種田山頭火」三恵庭市立図書館

山口市小郡文化資料館

新国語便覧